# 乳児閉塞型黄疸の早期診断法の開発と管理基準の設定に関する研究


班　員　東京大学小児科　白木和夫
研究協力者　東京大学小児外科　本名敏郎
東北大学小児科　鈴木宏
東北大学第2外科　大井龍司
筑波大学外科　沢口重徳
自治医科大学小児科　岡庭真理子
日本大学病理　志方俊夫
国立小児病院小児科　小林昭夫
順天堂大学小児科　山城雄一郎
帝京大学小児科　吉野加津哉
都立駒込病院感染症科　南谷幹夫


## 1.　総括研究報告

### 研究目的

乳幼児早期に閉塞型黄疸を呈する疾患には先天性胆道閉鎖症，新生児肝炎その他多くの疾患がある。先天性胆道閉鎖症は出生数1～2万人に1人の割で発生し，ほぼ同数のその他閉塞型黄疸と合せると5,000人～1万人に1人以上の患児が発生する。この内，先天性胆道閉鎖症は生後60～70日以内に手術が行なわれないと予後が極めて悪くなるが，他の肝内閉塞型黄疸とまぎらわしいため，しばしば診断が遅れる傾向がある。本研究の目的の1つはこの早期診断法の開発である。

これら疾患の治療はまだ確立されておらず先天性胆道閉鎖症は手術後の合併症が極めて多く予後を悪くしている。このため適切な管理基準の設定が望まれ，これが本研究の第2の目的である。

### 研究計画

管理基準の設定については，小児科側から岡庭，外科側は沢口が試案の作製に当り，これについて班員全員で検討改訂を加えた。

早期診断については，乳児閉鎖型黄疸そのものの発見が遅れる傾向のある点から，このスクリーニングの面からのアプローチと先天性胆道閉鎖症と肝内胆汁うっ滞との鑑別法の面からのアプローチを各班員により行なった。

### 研究成果

乳児閉塞型黄疸の早期発見と診断のための手引き（試案）を，一般医を対象として作成した(岡庭)。また乳児閉塞型黄疸の早期発見のためのスクリーニング法としてはLP-Xが有用であることが示された(鈴木，田沢)。先天性胆道閉鎖症とその他の肝内胆汁うっ滞との鑑別法として計量診断(白木，桜井)，スコア法（大井，千葉）が検討され，かなり有用であることが示された。一般生化学検査の内では，とくにLP-X（鈴木，田沢），α-fetoprotein（本名）が検査されたが，前者は鑑別にかなり役立つものと考えられる。また内視鏡による鑑別の試みもなされ，今後更に例数を増して検討する価値があるものと

思われた(山城)。

肝内胆汁うっ滞の病因に関しては免疫学的（吉野），ウイルス学的（南谷，志方）な調査が進められ示唆に富む結果が出たが，結論を得るに至らなかった。

先天性胆道閉鎖症の術後管理のための基礎的な問題として胆汁中胆汁酸パターンの検索(山城，山田)，抗生剤・利胆剤投与の検討（大井・千葉），上行性胆管炎と病型の検討（小林）が行なわれた。

これらを背景として先天性胆道閉鎖症の管理基準試案（沢口）が作製された。またその他の肝内胆汁うっ滞を呈する疾患の取り扱い方の基準に関しても，その試案（岡庭）が提示された。

次項以下，各研究協力者の研究成果のあらましを載せる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

乳幼児早期に閉塞型黄疸を呈する疾患には先天性胆道閉鎖症,新生児肝炎その他多くの疾患がある。先天性胆道閉鎖症は出生数 1～2 万人に 1 人の割で発生し,ほぼ同数のその他閉塞型黄疸と合せると 5,000 人～1 万人に 1 人以上の患児が発生する。この内,先天性胆道閉鎖症は生後 60～70 日以内に手術が行なわれないと予後が極めて悪くなるが,他の肝内閉塞型黄疸とまぎらわしいため,しばしば診断が遅れる傾向がある。本研究の目的の 1 つはこの早期診断法の開発である。